

【旧約聖書日課】出エジプト記 19章1～6節

<sup>1</sup>イスラエルの人々は、エジプトの国を出て三月目のその日に、シナイの荒れ野に到着した。<sup>2</sup>彼らはレフィディムを出発して、シナイの荒れ野に着き、荒れ野に天幕を張った。イスラエルは、そこで、山に向かって宿営した。<sup>3</sup>モーセが神のもとに登って行くと、山から主は彼に語りかけて言われた。

「ヤコブの家にこのように語り  
イスラエルの人々に告げなさい。

<sup>4</sup>あなたたちは見た

わたしがエジプト人にしたこと  
また、あなたたちを鷲の翼に乗せて  
わたしのもとに連れて来たことを。

<sup>5</sup>今、もしわたしの声に聞き従い

わたしの契約を守るならば  
あなたたちはすべての民の間であって  
わたしの宝となる。世界はすべてわたしのものである。

<sup>6</sup>あなたたちは、わたしにとって

祭司の王国、聖なる国民となる。  
これが、イスラエルの人々に語るべき言葉である。」

【使徒書日課】ペトロの手紙一 2章1～10節

<sup>1</sup>だから、悪意、偽り、偽善、ねたみ、悪口をみな捨て去って、<sup>2</sup>生まれたばかりの乳飲み子のように、混じりけのない霊の乳を慕い求めなさい。これを飲んで成長し、救われるようになるためです。<sup>3</sup>あなたがたは、主が恵み深い方だということを楽しみました。<sup>4</sup>この主のもとに来なさい。主は、人々からは見捨てられたのですが、神にとっては選ばれた、尊い、生きた石なのです。<sup>5</sup>あなたがた自身も生きた石として用いられ、霊的な家に造り上げられるようにしなさい。そして聖なる祭司となって神に喜ばれる霊的ないけにえを、イエス・キリストを通して献げなさい。<sup>6</sup>聖書にこう書いてあるからです。

「見よ、わたしは、選ばれた尊いかなめ石を、  
シオンに置く。

これを信じる者は、決して失望することはない。」

<sup>7</sup>従って、この石は、信じているあなたがたには掛けがえのないものですが、信じない者たちにとっては、

「家を建てる者の捨てた石、  
これが隅の親石となった」

のであり、<sup>8</sup>また、

「つまずきの石、  
妨げの岩」

なのです。彼らは御言葉を信じないのでつまずきののですが、実は、そうなるように以前から定められているのです。

<sup>9</sup>しかし、あなたがたは、選ばれた民、王の系統を引く祭司、聖なる国民、神のものとなった民です。それは、あなたがたを暗闇の中から驚くべき光の中へと招き入れてくださった方の力ある業を、あなたがたが広く伝えるためなのです。<sup>10</sup>あなたがたは、

「かつては神の民ではなかったが、  
今は神の民であり、  
憐れみを受けなかったが、

今は憐れみを受けている」  
のです。

### 【福音書日課】ヨハネによる福音書 15章1～11節

1「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。2わたしにつながっていないが、実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる。しかし、実を結ぶものはみな、いよいよ豊かに実を結ぶように手入れをなさる。3わたしの話した言葉によって、あなたがたは既に清くなっている。4わたしにつながっていないさい。わたしもあなたがたにつながっている。ぶどうの枝が、木につながっていないければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながっていないければ、実を結ぶことができない。5わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。6わたしにつながっていない人がいれば、枝のように外に投げ捨てられて枯れる。そして、集められ、火に投げ入れられて焼かれてしまう。7あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたの内にもあるならば、望むものを何でも願いなさい。そうすればかなえられる。8あなたがたが豊かに実を結び、わたしの弟子となるなら、それによって、わたしの父は栄光をお受けになる。9父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛してきた。わたしの愛にとどまりなさい。10わたしが父の掟を守り、その愛にとどまっているように、あなたがたも、わたしの掟を守るなら、わたしの愛にとどまっていることになる。

11これらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたの内にもあり、あなたがたの喜びが満たされるためである。

### 「わたしにつながっていないさい」【こども説教のために】

「わたしにつながっていないさい」、「わたしの愛にとどまりなさい」と、繰り返しお語りくださった主イエスの御言葉を、弟子たちは忘れられなかったのではないのでしょうか。逮捕されて十字架につけられた主イエスのもとから一度は離れてしまった弟子たちでしたが、ご復活の主イエスが現れてくださったとき、彼らは、「こんな自分たちに、今でも主イエスは、つながっていないさいと呼びかけてくださっている。自分たちを愛してくださっている」と、主イエスの御言葉を思い起こしていたのに違いありません。

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である」。弟子たちの教会は、主イエスのこの御言葉を、教会がどのようなところであるかを教えるものとして受け継いできました。礼拝堂には、ぶどうの木や枝、その実の図柄が装飾として用いられてきました。教会でぶどうの図柄を見れば、わたしたちは、自分たちが主イエスと一つであることを思い起こすのです。

わたしたちが主イエスとつながって一つでいるのは、主イエスが「天の御父」とお呼びした神とつながって一つでいらしたからです。主イエスとつながることで、わたしたちも「天の御父」である神とつながることができるのです。いいえ、御父である神がいつもわたしたちのことをご自分のもとから離れないようにと御心に憶えてくださり、愛を注いでいてくださっていることを、主イエスによって、わたしたちは知るようになるのです。

## 「わたしはまことのぶどうの木」

「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である」と語り始められたこのたとえの教えを、弟子たちは、ぶどう園の傍らで聞いたのかもしれませんが。

これは、主イエスが十字架につけられる前の晩、弟子たちと最後の食事の席を設けられた後のこととして伝えられている教えです。直前には、「さあ、立て。ここから出かけよう」(14:31)という主イエスが弟子たちに呼びかける言葉がありますから、食事を終えて家から出て、あの最後の祈りをされたオリブ山に向かう道すがらのことであつた、ということなのでしょう。時は深夜です。街の明かりを後にして、真っ暗な夜道を、わずかな灯をたよりに歩いたのに違いありません。もちろん大人ばかりでしたが、十人以上の者が黙々とお行儀よく行列を作って歩いていったわけではなかったでしょう。もしかすると、二人三人で話しに夢中になって、先頭を行かれる主イエスから遅れてしまった者たちもいたかもしれません。「先生、遅れている者がいます。離れてしまっています」と主イエスに言う者がいたのではないのでしょうか。集団から離れてしまった弟子たちが追いつくのを待つために、主イエスが弟子たちと立ちどまったところで、ふと脇を見ると、ぶどうの木が植えられた農園が広がっていたのかもしれませんが。

そのとき、主イエスは、預言者が語った「神のぶどう園のたとえ」を思い出されたことでしょうか。神が、土地を整備した農園にぶどうの木を植え、育てるようにして、ご自分の民を養い、手をかけてくださっているのに、そこで実つたぶどうは、酸っぱいものであつた、というたとえです(イザヤ書5章)。神の民として集められたはずの人々が、どうして、良い実を結ぶのではなく、酸っぱい実を結んでしまうのか。それは、世話をする農夫の腕が悪いからだろうか。否、実を結ばせる枝が、農夫の世話を受け入れず、農夫の整えた農地から養いを受けることを拒んでしまっているからではないか。そう教える預言者の言葉を、主イエスはご存じだったはずです。

その上で、主イエスは、敢えて弟子たちを「神のぶどう園」にたとえられたのではないのでしょうか。神が農夫であるぶどう園にとどまり、そこで農夫である神の世話を受け入れ、その地から必要な養いを受け、良い実を結ばせるようになること。そのためにこそ、ご自身が農夫である神と実を結ばせる枝である弟子たちをつなぐ幹の役割を負われていることを、主イエスは弟子たちにお語りにならずにいられたのでしょうか。

たった十数人の集団行動さえうまくできずに、列から遅れてしまう者のある弟子たちでしたが、彼らの揃うのを待ちながら、主イエスは、このたとえをお語りになられたのです。

## 「いよいよ豊かに実を結ぶように…」

教会は、主イエスを「まことのぶどうの木」とする「神のぶどう園」です。いいえ、むしろ、主イエスがこのたとえをお語りになられた、道沿いのぶどう園そのものであると言ったほうがよいのかもしれませんが。

日曜日ごとに、あるいは折々に、わたしたちは教会に集まって来ます。会堂が与えられているわたしたちは、もちろん、会堂に集まるのです。とは言っても、会堂がなかったら集まらない、というわけではありません。いつでも、どこでも、わたしたちは集まることができる。ただ、いつ、どこで集まるのかを知らされなければ、集まることはできないのですから、会堂があるのは大きな恵みです。

日曜日の教会に、わたしたちは集まる。会堂へと集まります。それは、いわば、一週の歩みの中で設けられた、待ち合わせ場所のようなものです。一週の間、主イエスと親しく歩んできた者も、離れて他の者と歩んでいた者も、一人迷って別の道に寄り道してしまった者も、ここに辿り着けば、追いつくことができる。そこに、主イエスが立ちどまれ、教えを語りながら、皆が揃うのを待っている集団がある。

久しぶりにおいでの方が、たとえ何年間も離れていらしたとしても、ここに辿り着かれたときに、当たり前のように集まりに加わり、互いの交わりを持ってくださる。教会とは、そういうところであるべきなのでしょう。その人は、離れていたようで、離れ切ることはなかったのです。遠ざかっていたようで、追いつかれたのです。

いいえ、毎週日曜日に教会に来ることを欠かさなかったとしても、わたしたちの姿は、大差ないでしょう。一週の間、ひと時も主イエスから離れずにいた者など、わたしたちの中には、きっと一人もいないのです。それでも、わたしたちは、会堂を目印とする教会に連れ戻され、集められ、ここにどまることを思い起こさせていただいている。

愛する皆さん、「ぶどうの枝」の皆さん。ここにどまりましょう。主イエスの「ぶどうの木」につながっていきましょう。この「ぶどうの木」は、神が農夫として手をかけ、世話をしてくださるのです。「良い実」を結ばせるためです。皆さんが「良い実」を結ぶために、神は、この「ぶどうの木」と「その枝」を手入れなさるのです。余計な、良い実を結ばせることのない枝は、切り落とされるでしょう。酸っぱい実を結ぶ恐れのある枝は、剪定されるのです。良い実が豊かに実るためです。

最後に、愛する皆さん。皆さんが良い実を結ばせるのは、豊かに実を結ぶようになるのは、その実りを待っている人たちが大勢いるからです。良い実を結ばせましょう。主イエスと共に、良い実を与え続けるのです。